

写生説成立以前の子規

水上 勲

1

子規の「写生」説については、今日なお決定的な評価は定まっていないように私には思われる。その大きな原因の一つとして、たとえば、その「写生」説における現実的志向とローマン的志向との混交といった問題があげられよう。

晩年に近づくにつれ、その「写生」説はたしかに深まってゆき、『病床六尺』では「写生といふ事は、画を画くにも、記事文を書く上にも極めて必要なもので、此手段によらなくては画も記事も全く出来ないといふてもよい位である。(略) 然るに日本では昔から写生といふ事を甚だおろそかに見て居った為に、画の発達を妨げ又文章も歌も総ての事が皆進歩しなかつたのである。」とされるに至るのであるが、度々指摘されるように、そこへ至るまでにはずいぶん前後撞着するような矛盾した主張も見られるのである。

写生説成立以前の子規

たとえば、新派俳句がこの論によって天下に広く知られるに至った、『明治二十九年の俳句界』(明治三十年)において、新派の代表作としてまず巻頭第一にあげられた句は、碧梧桐の有名な「赤い椿白い椿と落ちにけり」という句であり、子規はこれを「印象明瞭」と評しているのだが、今日から見れば、より美的ローマン的な性質をうかがわせる句である。絵画的ではあっても、特に「写生」的な句とは言えない。

同じように、子規による蕪村評価(『俳人蕪村』明治三十年)にしても、いわゆる写実主義の枠内にはとうていおさまりきれぬものが見られるので、たとえば蕪村の「理想的美」を評して次のように言っている所をみればよい。

「然れども絵画の写生にのみ依るべからざるが如く文学も亦実験にのみ依るべからず。(略)文学者の頭脳は四畳半の古机にもたれながら其理想は天地八荒の中に逍遙して無碍自在に美趣を求む。羽な

くして空に翔るべし、鰭なくして海に潜むべし云々。」

これだけをとりだせば、明らかにローマン主義的主張であるといえる。とても「写生」説とは考えられないので、混乱が生ずるのである。

もちろん、一方では同時に「写生」「写実」の必要なことがくりかえし述べられているので、それは次のような形で言われている。

即ち、「空想」(「理想」)から得た美は、最美なるか最拙なるか、どちらかしかない。初心者にはとても最美なるものは望みがたいから、ほとんどは最拙なものにしかならない。それに反して、実景をそのまま写す場合には、最美な句は得難いかもしいれないが、最拙にもおちいらす、まず第二流ぐらいの句はたやすく得ることができる。故に、初心者は写実を心がけるべきである云々。(『俳諧大要』明治二十八年)

また、実景を写す際には、何でも写せばいいのではなく、取捨選択が必要だとされる。「俳句は簡にして盡きんとする必要より美の最も多き部分のみを取り、其他醜なる者と不用なる者と美の少き者とは之を捨てることの已むを得ざるに至る、されば故意に修飾を為さずとも自然と修飾を為したる訳なり、いよいよ以て俳句は実景を写さんと心がくべし」。(『俳諧反古籠』明治三十年。傍点筆者)

このように自然の美しい部分だけをを選んで写生するというのであ

れば、それは近代写実主義としては不徹底なものであると言われても仕方ないだろう。現に、そうした評価をする人は多い。その一つの典型として、伊沢元美氏の論ずる所をみてみよう。

氏は、俳句革新運動において、子規の写生主義が始めから貫かれていたのではないとして、「写生」という方法はもっぱら月並俳句にまわりついていた概念的低俗性を攻撃するための有力な武器ではあったが、同時に「その『写生』が外面的で、内面的に十分深化せず不徹底であった」と指摘され、さらに子規の弱点として、我的自覚が不十分であったこと、ローマン主義による徹底した自我の解放のないところに真の写実主義は育たないということを述べられている。(『新版日本文学史近代Ⅰ』至文堂による。)

たしかに子規の「写生」説は、言われているような問題性をはらんでいるが、こうした批判は私にはやはり観念的、先験的なものではないかと思える。子規は何も西欧写実主義理論をそのまま鵜呑みにして、俳句革新に応用したわけではない。むしろ、その影響も認められるけれども、その大筋はあくまで彼自身の自前の思考、感受性によって形成されたのであり、それを一概に不徹底として斥けても意味がないだろう。必要なことは、子規自身(あるいはその傘下に集まった人々)にとって「写生」説の持っていた主体的、内面的意味を問うことではなければならない。しかし、その作業はひじょう

に複雑で、様々な角度からのアプローチが必要である。以下、十分でしかないけれども、主に子規の漢詩などを手がかりにして、子規「写生」説形成過程を追ってみることで、そのアプローチの一つとしたい。

2

子規のローマン性をさかのぼっていけば、子規のいわゆる「仙人的思想」にまでいきつくと考えられる。即ち、明治十七年の『筆ま

かせ』中に同名の記事があり、そこで彼は、故郷松山にいた頃、友人たちと暇があれば詩画会を開いて楽しみ、ある日友人の一人の安長松南が自宅へ遊びにきて絵を画いた時に、学校を卒えた後に閑居する計画を話しあい、そのデザインを松南に画かせたようなことがあったと記している。そのデザインというのは、正面には山間から瀟がながれ落ち、岸の岩石の間に一軒の水亭があつて、そこで詩を賦し水を聴いているのが子規自身であるといったものであつた。

子供らしい遊びといつてしまえばそれまでだが、松山中学時代に子規が漢詩文に親しみ、神仙的思想に憧れ、文人的趣味に夢中であつたことは良く知られている。こうした東洋的な離俗趣味も消極的な意味でのローマン性を示すものといえるだろう。

写生説成立以前の子規

柳原極堂の『友人子規』によれば、松山中学へ入学した明治十三年（子規十四才）の頃から、彼ら仲間うちにかんに詩文の研究が始まり、同親吟社なる詩会を組織して、旧藩儒河東静溪に添削指導を受けた。その有様は、「詩文に熱中せし子規等は此時書画会を興して山水画を習ひ篆刻を試み、或は画中に見る如き仙境に遊んで詩想を計る等、漸く詩人的思想、文人的趣味に陥没し、聊か青年学生たるの意気を喪失するに至つた。」ようなものだったという。

「余は幼時より何故か詩歌を好むの傾向を現はしたり」（『筆まかせ』中「哲学の発足」）という子規の、最初の興味がこのような漢詩趣味に発揮されたということは、注目すべきことである。当時、十四、五才の中学生たちがこうした詩画会をもつて、山水画を描き、将来の隱栖の地の理想としたりしていたということは、ごく普通のことであつて特別視することはできないかもしれないが、極堂の言にも「聊か青年学生たる意気を喪失」したものと言われているように、その熱心さにはやや異常なものがあつたようである。

このような漢詩趣味、脱俗趣味が、松山の中学生子規たちの間に流行したということの背景には、まず松山周辺のゆたかな自然にめぐまれた環境があつたことは言うまでもないが、今一つ社会的な要因として、維新以来松山藩が置かれた佐幕派としてのひじょうに不利な立場が作用したのではないかと考えられる。その辺の事情につ

いては、松井利彦氏の新著に詳しく記されているので省略したいが、維新以後、佐幕派であったために、旧松山藩士たちは要職につけず、その殆どは逼塞した生活を余儀なくされ、帰農したり売り喰いの毎日をすごすしかなかったという。少年子規たちが、おのずと眼を脱俗的な自然界に向け、文人趣味に遊んだというのも、伝統的環境から来るもの以外に、そうした松山藩の特殊な事情もからまっていたと考えられる。(子規自身には直接そうした問題にふれた文は遺憾ながらほとんど見当たらない。)

ともかく、こうして多感な少年時代に、東洋的隠者的な「自然」に憧れる所があったということは、のちの子規を考える上で重要なポイントを占める。ここで、実際に当時子規が作っていた漢詩を見てみたい。

「仙人的思想」をしめしているのは、次のような詩である。

「尋涼到山寺」(明治十四年作)

古松勁柏白雲間 禅室臨溪意自閑

沸々茶鑪風在坐 与僧对坐愛青山

「題自画山水」(明治十五年作)

独援枯笔試一揮 披麻半点漫淋漓

休言磊落不成様 窓外青山是我師

「無題」(同右)

閑雲一片拖幽壑 只有仙童独採葉

山靜花開者日長 潭澄水暖遊魚樂

これらの詩には特に目立った特徴はないが、当時の漢詩の中で、注目に値するのは叙景的な詩である。叙景ということ自体は漢詩の必然的傾向でもあるが、田舎の田園の光景を瑞々しく詠んだものにすぐれたものが多く見られる。

「夏日田家」(明治十四年作)

茅舍柴門桑拓中 檐端来去燕、乘、風、

農、兒、牽、犢、遲、々、返、西、嶂、斜、陽、一、半、紅、

「田家即事」(同右)

黃梅雨足熟梅黃 尤愛清風一味涼

看取南窓消暑策 水田十里插新秧

「秋日野望」(同右)

雨霽秋郊欲夕陽 遠雲斷処雁成行

平田十里村三四 早稻遲粳一樣黃

「登大州城」(明治十五年作)

遺跡空荒棘 回頭感慨多

人家遙帶野 城郭直臨河

雲外聳松柏 溝中滿麥荷

俯看急灘上 小艇載薪過

「夏日田家」(明治十六年作)

鳥声々聒緑陰辺 数片墨雲拖暮天

窓外好看稲苗緑 一行疎雨過平田 (以上傍点筆者)

こうした詩であるが、いづれも田園の自然を背景に即して詠もうとしている点がかがわれて興味深い。若くして子規はこのような田園自然美にうたれることが多かったと思われるが、そのことを示す後年の彼自身の回想をここに引用しておきたい。

「余は子供の時から自然界の現象がひどく好きであった。何人も間を全く嫌ふた訳ではないけれど人間には気に喰はぬ人間が多いから、それよりは自然界の美麗で柔順で少しも我意に逆らはんんだのが気に入ったのであらう。」(『赤』明明三十二年)

「幼時より客観美に感じ易かりし吾は我家の長物(かるたを除く外)一として美とすべき者無きを見て心に樂まず、如何にして吾は斯る貧しき家に生れけんと思ふに、常に他人の身の上の妬ましく感ぜられぬ。ひとり造化は富める者に私せず、我家をめぐる百歩ばかりの庭園は雑草雑木四時芳芬を吐いて不幸なる貧兒を憂鬱より救はんとす。」(『吾幼時の美観』明治三十一年)

後年になってからの回想であるから、いくぶん割引いて見なければならぬにしても、やはり子規の内面には、こうした自然美崇拜的な傾向が早くから芽生えていたと考えてよいだろう。その「仙人的

写生説成立以前の子規

思想」には、このような清新な自然美への感動というものが含まれていたことを見逃してはなるまい。

以上、子規の漢詩趣味の一端として「自然」崇拜的傾向をとりあげてみてきたが、しかし当時の若き子規を単にそうした一面だけで律してしまうことはもちろんできない。

よく知られているように、子規は中学時代の終りごろ(明治十五年冬から翌年十六年夏へかけて)、自由民権運動の影響を強く受け、さかんに演説会などで熱弁をふるっている。ちょうど明治十四、五年は全国的に自由民権運動が最高の盛りあがりを見せた時であり、松山には隣接する高知の立志社、徳島の自助社などから自由党の志士がたえず入りこみ、民権の確立と専制政府打倒を熱烈に訴えあっていたと言われており、多情多感な少年子規が動かされぬはずがなかった。かくて、子規はそれまでの「仙人的思想」から一変して、きわめて現実的社会的な行動に走っていった訳であるが、その行動を支えていたのは、透谷をとらえた同じ「アンビション」(野心)であったといっている^⑤。英雄豪傑に憧れ、自ら志士として天下国家に名を挙げんとする素朴なヒロイズムが、当時の漢詩のもう一つの顕著な傾向として指摘できる。

「詠史」(明治十五年作)

赫耀金瓢百万軍 猿郎意气太虚寬

五九

自曾樹上勞飢虎 疎野無人罵楚冠

「咏史」(同右)

奮然裂封冊 冠服肅威儀

聚棗豊関白 寒村一健兒

「華盛頓」(同左右)

果看草莽起英雄 焦思碎心百戰中

血雨劍花香爛慢 中含天地自由風

特に最後の詩は、子規の自由民権意識がはっきりうかがえる作である。秀吉によせる崇拜にも子規の「野心」があきらかに見てとれる。これ以外にも、「謁義農墓」「題蕭何逐韓信図」などの長詩、また上京以後の作であるが、「題西郷隆盛投海図」「谷少将熊本籠城図」などの長詩には、子規の政治的関心がよくうかがわれる。

「自由」なり「民権」なりに対する理解がどれほど深いものであったかは疑問であるにせよ、ともかくこの民権運動とのかかわりによって、圧政に反抗する気骨といったもの、独立自尊の精神が養われたことは疑いないであろう。その生涯を貫く反権威主義的な在野精神は、この当時に芽生えたといえる。

さらにここで今一つ注目すべきことは、この民権運動への参加と共に、学問の関心を漢学から洋学へとうつしている点が見られることである。明治十五年十月二十二日附三並良あて書簡では、「仮令

如何程漢書の濫奥を極め、如何程仁義の妙境を説くも、若し洋書に通ぜず広く世界の事情を知らず、今九州に於て大乱あるを知らず又魯清の災、英埃の乱、日清の変だも猶ほ之を知る能はず、悠然として一茅屋の裡に偃臥するは是れ田野の一腐儒のみ。(中略)夫れ漢学の人を卑屈頑固に陥らしむる此の如し。豈漢書のみを読んで可ならんや。」と、口を極めて漢学を非難攻撃している。

よく知られているように、子規の母方の祖父、大原観山は藩では有数の著名な漢学者であり、幼い子規に漢学を教え、七、八才のころまでマゲを結わせ、腰に小刀を帯びさせていたといわれている。また、子規に与えた七言絶句には、「終生不読蠻行書」とあったという。(「室内の什物」)。それだけに子規において漢学の重圧は強く、先に見た脱俗的自然への憧れも、そのような伝統的漢学のもたらす心理的圧迫からの逃避を求めた結果であったとも考えられる。そういう中で、はっきり漢学を否定して、洋学の必要を説くにはかなりの心理的抵抗があったろう。ここにも、たとえば島崎藤村と父正樹といった、世代的対立が否応なく生まれていた。(子規の場合は、父が早く亡くなっていたから、それほどきびしい対立はなかったと思われる。)

そうしたことの結果として、子規は、故郷を離れ、上京したいという強い願いをしきりに抱くようになる。「海南は英雄の留まる所

に非ず、早く此地を去つて東京に向ふべし」(傍点筆者) というのが、子規の当時の意気込みをよく示している。周囲は中学を卒業してからでも遅くない、と反対したが、彼は中学校の圧制的な雰囲気はどうしても我慢できず、ついに十六年六月、叔父加藤恒忠(拓川)の援助で上京することとなった。「松山中学只虚名、地少良師孰從聽(略) 忽悟天真存万象 披蛛網救蜻蛉」という詩が離別の詩として今日残されている。

3

上京当時の子規は政治家たらんと志ざしていたという^⑧。それも朝にあつては太政大臣、野にあつては国会議長というのであるから、やはり子規のアンビションも相当なものがあつたわけである。

その後の子規は、一見きわめて順調な道を歩んでいたようにみえる。須田学舎や共立学校へ英語を学びにしばらく通い、松山藩出身者のための育英会である常盤会から給費をもらうこととなつて、学資の心配がなくなつた上に、十七年九月には本人も予期しなかつた大学予備門に合格し、将来の道が開けるに至つたのである。

しかし、結果的には、子規は文学(特に詩歌)に熱中しすぎて、明治二十五年には折角入学した大学を中退してしまつことになる。上京当初、偉大な政治家を志ざしていたはずの子規が何故そのような

な結果になつていったのか、それが当面の問題とならう。

さて、上京当初、政治家をめざしていたはずの子規は、明治十八年春には「哲学を目的とし誰がすすめても変ずまじ」と思いこむに至つたと記している^⑨。それが何故か、はっきりとはわからないけれども、ここでむしろ重要なのは、同じ文章で「余は幼時より何故か詩歌を好むの傾向を現はしたり」として、明治十三年春から十五年秋ころまで、漢詩を多数作つたこと、十二、三年ころより軍談を好み、馬琴を愛読したこと、十八年には井手真棹を尋ねて歌をはじめ、また二十年には大原其茂宗匠を訪れて俳句をはじめたことなど、いかに文学詩歌にひかれる所があつたかをくわしく語り、今年になつて、同じ哲学といつても、文学美術とかかわりあう審美学を専攻しようとするに至つたと記していることである。この文章を記したのは、明治二十一年であるから、十八年春の哲学志望はもうこの頃にはかなり文学志望に傾いていたと考えていいだろう。ともかく、この時代に子規の志望が、政治、哲学、文学と三転していったことは疑いない。その推移を以下見てみたいと思う。

前節で見た漢詩は、引き続き明治十七年にも百首近く作られ、以後しだいに減少していく傾向にあるが、まずその漢詩から見ていきたい。子規のこの頃の内面をうかがう第一資料は、ほとんど漢詩しかない。(隨筆『筆まかせ』には明治十七年から二十年までの記

事はきわめて少く、ほとんどは二十一年、二十二年、二十三年のものである。

大きな野心をもって故郷を捨て、洋学を学ばんとして上京した子規に「何須雌伏老郷土」(「贈柳原如水」)という感想が見られるのは当然だが、しかし明治十七年には、早くも挫折感の漂う詩が見られる。

「偶成似某子」(明治十七年)

南窓読史消永夕 滿胸慷慨感今昔

人生五十真一夢 丈夫畢竟何所獲

貧賤不用經濟才 治世難行縱橫策

一代功業多不成 能得幾人名赫赫

只剩累累墳墓在 北邙明月枯骨白

「偶成」(同右。今前半を略す。)

我已無膽又無才 狂瀾已倒何得回

嗚呼我已矣我已矣 乾坤茫茫將咎誰

齡已十八心如孩 身余五尺癯作災

病骨早埋青草去 後身願為豊公來

(傍点筆者)

生まれかわって豊太閤になりたいというところに、依然として子規の「野心」が感じられるが、十八才の若さでこうした無力感をうたうとはどういうことであろうか。漢詩特有の誇張された表現をさ

しひいても、子規に何らかの心境の変化があったと考えられる。私には、子規のこうした詩の背後に、かつての「仙人的思想」の投影を見ずにおれない。

その意味で、次の詩は興味をひく。

「東都雜詩」(明治十七年)

八百八街遶鳳城 僦居方向此間成

漲天昏靄風塵色 滿地晴雷車馬聲

製造偏驚奪天匠 開明却怪薄人情

(以下略、傍点筆者)

子規が故郷を捨ててやってきた東京では、その当時、各地で次々に起きる自由党左派の武装蜂起の噂が人心を不安に陥入れる一方、他方では十六年十一月に開館式を行なったばかりの鹿鳴館で、華やかな舞踏会が度々催されていたはずである。子規とてそうした世相風俗に無関心であったとは思われない。その「開明」社会に必ずしも子規は満足していなかったことがこの詩にうかがえる。大学予備門での授業にも十分には満たされなかったらしいことが、「筆まかせ」の所々に記されている。自由民権運動の激しいうねりも失せ、彼の内部にはしだいに「文明開化」に対する懷疑の思いが兆し始めていたのではないか。加うるに、病身という自覚(明治二十一年夏、鎌倉旅行中始めて咯血する)が、一層そうした思いをかきたて

る。

「秋日書懷」(明治二十一年)

十七負笈遊帝畿 芸窓讀書三絕章

焚膏繼晷非不勉 倏忽五年心事遠

想見萱草空寥落 夜々闔門待兒扁

病軀憔悴業未成 菽水何日奉慈闈

故鄉西望三千里 山々紅葉錦似衣

後に、明治二十四年始めて帝國議會が開かれた時にも、かつての理想が実現した訳であるのに、「昭代深窮政教原 仁風雨露沐天恩」と天皇を賛美しながら、「書生於世本無用 対几遙聞車馬喧」と自ら無用の人とする。

こうした挫折感、無力感と種を接するようには、脱俗的自然への憧れも再び詩に詠まれ出す。それ以前にも、東都の名所を訪れては詩作しているが、「(九段坂所見)「墨堤」「遊飛鳥山」「遊靖国社」等)、詩としては今一つ面白味を欠く。やはり子規には「北予山川長入夢 東都風物不成詩」(併似故園友人)明治二十二年」というのが実感であつたらう。

病身にもかかわらず、よく彼は旅をして歩いているが、そういう時の叙景詩にはすぐれたものがある。たとえば明治十九年夏、旧藩主の子息と日光に遊んだ時の詩「登鴻巣山」では、

写生説成立以前の子規

(前半略)

雲烟撲顔冷 天風吹衣寒

縹渺宇宙濶 下界望塵甕

谷川横似帶 群山踞成環

此時一心清 悠々如神仙

生来有素志 無為欲入玄

翻然捩世事 再遊知何年(傍点筆者)

と詠み、老莊的自然への憧れをみせている。

やや下って、明治二十三年「上武州高尾山」では、

冷気撲顔衣欲沾 老杉十丈喚仙禽

絶崖紅葉重々遠 曲径白雲歩々深

杖底平原八百里 帽端峻嶺三千尋

風光無処不詩料 造化慰人似有心(傍点筆者)

とあり、これには「南唐先生評 傑作的是得獄神之助者」とか

「雲林先生評 一氣呵成似李白詩」と記されてあって、詩文仲間にも好評であつたようだ。

こうして、子規の漢詩の眼目は次第に自然の叙景の上に發揮されはじめる。前年帰省した時の経験にもとづいて作詩された明治二十五年の「岐蘇雜詩」三十首が、その代表的作品といえよう。ここではそのうちの一首だけを引いておく。一読して絵画的な印象をうけ

六三

る。実景に即して描写されているからであらう。

「其二十」

当顔乱嶽碧嵯峨 細径斜從鳥背過
一百長程不離峽 十余破駅盡沿河
家山入夢路猶杳 霜露警人秋已多
晚叩茅扇除濁酒 村娘唱出竹枝歌

4

一方の俳句の方はこの間どうであったか。『寒山落木』によるかぎり、明治二十三年頃までは、その数も少なく、見るべきものも少ない。二十四年にやや増えて、二十五年には千六百有余、二十六年に至って三千余の句が詠まれている。従って、本格的な作句は二十五年以降と見てよい。

子規が俳句を作り出したのは、明治二十年夏、帰省した折に大原其戎を訪れて以降のことであるが、よく言われているように、その出発時には月並俳句とほとんど変らない句を作っていた。

茶の花や利休の像を床の上
白梅にうすもの着せん煤払

青々と障子にうつるはせを哉

不二こえたくたびれ白や隅田の雁

雪よりも時雨にもろし冬牡丹

鳥なくや独りたたずむ花の奥

一日の旅おもしろや萩の原

水鳥や声うら枯れて夕日影

其戎の俳諧雑誌『真砂の志良辺』に掲載されたのはこうした句である。中にはすぐれた句もあるが、やはり月並調のものがほとんどである。

子規の努力は以後、こうした観念的な風雅観にとらわれた俳句ではなく、実景実情に即した自然を俳句に詠むことに向けられていくのであるが、既に見てきたように、それは漢詩によって切りひらかれた道と異なるものではなかった。むしろ俳句はその跡を追っていたと言っていると思う。

今、『寒山落木』の多数の俳句を逐一検討する余裕はないので、俳句を含む紀行文によって、いかに子規俳句が自然詠に写実的な力を見せるようになったか、一瞥しておきたい。子規の紀行文は全体ではかなりの数にのぼるが、特に多いのは明治二十五年から二十七年にかけてである。ちようど、いわゆる「写生」開眼の時期と重なっている^⑧。

二十五年には『かけはしの記』『大磯の月見』『旅の旅』などがあるが、特に後の二者にはともかく実景を句に詠みこもうと努力

している跡がみられて、興味をひく。

『大磯の月見』では、雲の月を詠んで、

いろ／＼の形となるや雲の月

尻を出し頭を出すや雲の月

名月へかかれば遅し雲の脚

名月やもう一いきで雲の外

また、名月を詠んで、

名月や誰やらありく浪の際

名月や何やら踊る海の内

名月や雌浪雄浪の打ち合せ

名月や汐に追はるゝ磯伝ひ

砂浜に足くたびれる月見哉

砂浜に打ち広げけり月の汐

などが記されている。句として必ずしも成功しているとはいえぬ

ものが多いが、一年前の紀行『かくれみの』に見られる句、「道づれ

は胡蝶頼むやひとり旅」「鶯や恋をひらけば竹の藪」「世の人に踏ま

れながらや花重」「つむもをしつまぬもをしや春の草」「よく見れば

たった一羽の雲雀哉」「てふく／＼やあひ宿たのむ草まくら」といっ

たものに比べれば、はるかに卒直に自然の実景を詠んでいる。

同年の『旅の旅の旅』は箱根を旅した際の紀行であるが、ここで

写生説成立以前の子規

はすでに非常にすぐれた写生句を見せている。

石原に瘦せて倒るる野菊かな

樵夫二人だまって霧をあらはるゝ

唐きびのからでたく湯や山の宿

朝霧や馬いばりあふつづら折

秋の海名も無き鳥のあらはるゝ

浪きはへ蕨はひ下りる十余丈

こうした句になると、もはや漢詩では不可能な、精細かつ簡潔な

写実が行なわれているといえよう。詠まれている情景はごく日常的

な田舎じみたものではあるが、そこにある清新さが感じられる。

のち、『頼祭書屋俳句帖抄上巻』の序文においても、この明治二

十五年に「明月を大磯に見て其れから箱根へ旅して帰った時には少

しく俳句の寂といふ事を知ったやうに思ふた。冬の始めに鳴雪翁と

高尾の紅葉見に行た時は天然の景色を詠みこむ事が稍々自在になっ

た。

麦時きや束ねあげたる桑の枝

松杉や枯野の中の不動堂

などいふ句は此時出来たので、平凡な景、平凡な句であるけれど

も、斯ふいふ景をつかまへて斯ういふ句にするといふ事がこれ迄は

気の附かなかった事であった。」と記している。

六五

文中の俳句は『高尾紀行』（明治二十五年）に見られるもので、他にも、

冬川の涸れて蛇籠の寒さかな

屋の棟に鳩並び居る小春かな

鮎死で瀬のほそりけり冬の川

新宿に荷馬ならぶや夕時雨

などのすぐれた写生句がある。こうしてみれば、このような紀行による句作が、子規の「写生」説形成に重要な役割を果たしたことがわかる。

が、こうした俳句が生まれた背景には、先に触れた叙景的な漢詩に見られる反俗的な自然崇拜——観念的「風雅」的なものではなく——が、思想感情として先行していたことを見逃してはなるまい。

子規の写生句はごくありきたりの自然の風物に美を発見することによって成立した。その魅力は、そこに表現されている自然の初々しい清新さ（卑俗な人間臭さを免がれた）にある。その美を適確に表現するには、自己の小主観を押え、美と感じた所をありのまま卒直に表現する手法がもっとも適していたのである。従って、その「写生」は主観とか客観といった範疇に入るものではなく、客観的「写生」がそのまま彼には主體的感動の表現なのであった。はじめに触れたローマン性と現実性の混交という問題もこうした観点から再検

討さるべきであろう。

とはいえ、しかしここにはなお大きな問題が残されていると言わねばならぬ。果して俳句はそうした自然の美だけを表現している良いのか、人間社会の複雑な現実を表現することは不可能なのか、不可能とすれば近代詩としての俳句の存立は危ういのではないか、という問題である。これについて子規はどう考えていたであろうか。

5

いわゆる「自然と人事」という問題については、子規もやはり深く考えさせられる所があったに違いない。明治十年代の欧化主義の風潮においては、和歌俳句の如き短詩は複雑な思想内容（人事的なもの）をうたうことができないとして否定され、新体詩の必要が叫ばれた。（『新体詩抄』序文）。否定された側でも、その批判を受けとめて短歌にかわる長歌や今様の形式を復活し、新体詩に形式的にも劣らぬ長詩を作れ、という声がおこった。いわゆる和歌改良論である。内容的にも、叙情詩より叙事詩を作れ、という声がそこには見られる。^⑧

しかし、俳句においては短歌にかわる長歌といったものもなく、新体詩運動や和歌改良運動と比べて、近代化のための明確な目標を立てにくく、俳句世界の大部分は旧態依然たる芭蕉崇拜だけで、

「自然」か「人事」かといった問題それ自体すら、ほとんど意識されなかったようである。子規はそういう状況にあって、このような問題についてどのように考えていたのだろうか。

実はその点については、すこぶる単純な解答が与えられていたといえる。一言でいえば、和歌俳句の如き短詩型のもは「自然」を詠めばそれで良い、と子規はいうのである。

既に『癡祭書屋俳話』中の「新題目」において、彼は維新以来の急激な西洋物質文明の流入による、いわゆる新題目（汽車、ガス燈、電線といった類）を和歌俳句に詠むことに對して、「敢て之を拒まずといへども亦之を好むものにあらず」とはっきり否定し、その理由として「文明世界に現出する無数の人事又は所謂文明の利器なる者に到りては多くは俗の又俗陋の又陋」（傍点筆者）と言い切っている。

ひき続いて書かれた『我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず』（明治二十五年）及び『文学雑談』（明治二十六年）の二つの評論においては、我国詩歌の伝統は叙事より叙情、叙情より叙景にすぐれるとして、その特徴を「語を換へて言はば錯雑にして変化多き人間社会の現象を模写せずして専ら簡單にして静默なる天然を模写せし」^{（オキチニヤ）}点に求め（以上前者）、後者では「欧米諸国の詩は、主として人事を叙し、和漢二国の詩歌は主として自然を叙す」と區別して、

写生説成立以前の子規

「欧米に心酔する者」が日本の伝統的詩歌に「妙篇大作」がないと非難することに対し、「高尚なる觀念、纏渺たる神韻は果して生存競争優勝劣敗の騷擾より生じたる人事の紛々に在る」のか（傍点筆者）、と問いなおしている。見られるとおり、子規はここでははっきり国粹主義の立場に立つて発言している。新体詩運動や和歌改良論と比較して、むしろ子規の頑固な保守性を感じさせる論であるけれども、このように国詩に叙景詩と断定した背後では、先に見たように多くの紀行文が書かれ、写実的な叙景句が作られていたことを忘れてはならない。子規の叙景句にはこうした意味で、一種の思想性があったといっている。「生存競争優勝劣敗」の「文明開化」を「俗の俗又陋の陋」として否定する所に、子規の国詩に叙景説が成り立っていたのである。

いわゆる明治二十年代国粹主義は、条約改正反対という政治的課題を担っていたが、単にそれだけにとどまらず、鹿鳴館文化に代表される如き明治十年代の欧化的思潮への反省という大きな歴史的意识を有していたことは言うまでもない。かつて自由民権運動に熱中していた子規は、その後約十年の歳月を経て、今は国粹主義者として我々の前に現われている。しかし、それは思想的な転向ということではなく、子規の内面に自由民権論にも、国粹主義論にも共鳴しうるものがあつたといふべきであらう。^⑤

六七

良く知られているように、二十年代国粹主義論の指導的論客たち（『日本』新聞や、政教社に拠った人々）の言説によれば、それは決して西欧的な「自由」とか「民権」といった思想を排除するものではなかった。特に子規の場合、「日本」新聞主筆たる陸羯南との交際が上京以来であったことからして、国粹主義的立場に接近していた事は不思議でない。

ともかくこうした国粹主義的立場から、子規は俳句革新の方向を自然の「叙景」という一点に定めて進むこととなった。そこにとらえられた自然——平凡な田舎じみたものであったが——は、このように反「文明開化」的な精神によって把えられた自然であった。

「僅かに英字を解する者翻訳書を読み得る者乃ち曰ふ人間を説くは人間最上の美術なり、人間を説く者ドラマに如くはなし、故にドラマは人間最上の美術なりと。（略）焉んぞ知らん人間は宇宙の一部分にして所謂自然界は渺々漠々人間の四辺に際限も無く拡がり居るを。人間界は善悪混淆真偽錯出して榮枯盛衰は朝夕を計らず、一生一死は百年の瞬間を保つ能はざるに独り自然界は一定の時間に一定の変遷を經、江上の清風と山間の名月とは千古依然として取れども盡くるなきに非ずや。」（『春色秋光』明治二十六年）

このように子規が言う時、我々は子規にとって「自然」がもった東洋的な性格に眼を向けざるを得ない。しかし、それは単なる伝統

的な風雅的自然観ではなく、「文明開化」の激流の中で一層露骨に表面にうかびあがってくる醜悪な人間的エゴイズム（生存競争優勝劣敗）に対立する、そうした意味で浄化された自然なのであった。ここに自然、詩人としての子規が誕生する。その限り、それは子規のみならず、独歩にも芦花にも共通して言えることであろう。

もっとも、その自然が「叙景」の対象として絵画的にとらえられる限り、傍観的性質をもたざるをえなかったことも否定できない。が、ともかく子規において「自然」が「社会」（人事）との緊張関係において意味をもったこと、子規自身においてもその「社会」「人事」に寄せる関心そのものはきわめて根強いものがあつたことを見落としては、子規の本質は見失なわれることとなると思われるのである。

註

① 松井利彦『正岡子規の研究』（昭和五十一年）の第三章「子規の精神風土」参照。

② 高浜虚子「死絶えた家」（大正元年）が参考になる。

③ 管見のかぎりでは、「十年前の夏」（明治三十一年）の中で、明治十九年夏に旧藩主の子息と日光漫遊を試みた折、ある料理屋で維新の際兵をひきつれて松山藩へ乗り込んだ長州人某とばったり出会ったことを記し、今さらながらくやくしく思った

とあるのが唯一のものである。

⑭ 陸羯南『子規言行録』序文（明治三十五年）参照。

④ 柳原極堂『友人子規』（昭和十八年）

⑤ 高浜虚子『子規居士と余』（大正四年）を参照。いかに子規が野心家であったか、虚子の眼から描写している。

⑥ 柳原極堂 前掲書。

⑦ 「諸君将ニ忘年会ヲ開カントス」（明治十五年十二月 演説草稿）

⑧ 『筆まかせ』中、明治二十一年「哲学の発足」

⑨ 同右。

⑩ 『癩祭書屋俳句帖抄上巻』序文（明治三十五年）参照。

⑪ 「我が俳句」（明治二十九年）参照。

⑫ 落合直文『新撰歌典』緒言（明治二十四年）、「賛成のゆゑよしをのべて歌学発行の趣旨に代ふ」（明治二十五年）など参照。

⑬ 自由民権論にふれる以前にも、子規のナシヨナリズムを示す漢詩が見られる。子規は幼時から尊皇攘夷主義者大原観山の影響を受けており、気質的に国粹主義的であったと見られる。絵画に対する趣味も、もとは日本画崇拜であったし、明治二十四年十一月の、漱石との『明治豪傑譚』『気節論』をめぐる論争などからもそう感じられる。そうした土壌の上に自由民権論をうけとめたと考える方が正確である。

写生説成立以前の子規